申請者：加藤雅俊

論文題目： Empirical Studies on the Dynamics of Industries

審査員　長岡　貞男
山内　弘隆
伊藤　秀史

本博士論文は、産業内の企業の競争ポジションの変化の源泉についての実証研究である。

４つの論文から構成されている。第２章(“Market share instability”)は、企業の市場シェアの時間的な変動(上位３社のシェアの変化の絶対値の合計あるいはシェアの変化率の絶対値の合計、以下「市場のモビリティー」)が、市場の集中度、研究開発集約度などの産業特性によってどのような影響を受けるかを分析している。109産業における1995年から2001年の間の各企業の市場シェアの変化の分析結果によれば、市場集中度の効果は、市場の集中度が高い産業と低い産業では異なっており、前者では更に市場集中度が高まるとのモビリティーは低下し、後者では逆の効果がある。また、産業の成長率の不安定性は市場のモビリティーを高める効果があることも見いだしている。このような分析に当たっては産業の固定効果をコントロールしており、産業レベルの欠落変数による見かけの相関ではないことも確認している。

第3章(“Rank stability in the long run”)は、51の産業財産業の約25年間(1977-2001)の長期データを使って、各産業における上位3社の順位変動が起きる確率が産業のライフサイクル上でどのように変動するかを、分析している。その結果、市場の集中度が高い産業では上位企業の順位変動は起きにくいこと、また産業の成熟期でもこれが起きにくいことを見いだしている。関連した分析で、第4章(“The duration of market leadership”)は、376産業の1975-2004年の長期データを利用して、トップシェアの企業がトップを維持しつつづけるかどうかを決める要因を生存分析の手法を用いて分析している。資本集約的な産業では持続性が高く、また需要のボラティリティーや研究開発の集約度が高い分野では持続性が低いことを見いだしており、後者ではシュンペーター的な競争が重要であることを示している。

第5章(“The evolution of market structure in the Japanese motorcycle industry”)は、日本のオートバイ産業における長期的な産業組織の変化、すなわち、産業創設期の最初の10年における多数の企業の参入(ピーク時には約200社)、その後の集約化(4社の寡占体制)の過程を生存分析の手法を用いて実証的に分析している。早期に参入した企業及び初期に大きな規模で参入した企業は有意に生存確率が高いことから、先行者優位の存在を確認している。また、エンジンの品質が、生存するかどうかに非常に重要な影響を与えており、エンジンの改良に向けた技術開発競争が結果として寡占体制につながったことを見いだしている。

データの制約もあり各論文が必ずしも統一した枠組みによる補完的分析にはなっていないこと、またこのような結果が得られる理論的なメカニズムの研究が残されていることなど、今後の研究課題はあるが、以上のように、本論文は、企業の競争ポジションについて、大量の企業データの収集と特定産業の詳細なデータの収集に基づいて、オリジナルで質の高い研究成果を集約した内容となっている。よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第５条第１項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。